

---

# とある病院の診療記録

バヌケソ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある病院の診療記録

### 【Nコード】

N3829L

### 【作者名】

バヌケソ

### 【あらすじ】

上条当麻、またもや入院。百戦錬磨の彼を再び病院送りにする凶刃の正体やいかに！

とある科学の超電磁砲の二次創作品。上条当麻と御坂美琴がメインのストーリーです。《4/1追記》10か月の時を経て、まさかの100pt超え！読んで下さった皆さん、ありがとうございます！

## 第1話：とある入院患者（前書き）

自身初の連載作品。

しつかり起承転結できるかわかりませんが、  
どうか宜しくおねがいします。

5 / 14（金） 文章改正しました。話の成り行きは変わっていません。

## 第1話：とある入院患者

上条当麻は自他共に認める不幸体質であると同時に、入院の常連でもあった。

様々な事件に首を突っ込んでは大怪我を負い、その度に病院に運ばれてきたのだ。

医療スタッフの間では、彼はちょっとした有名人になっていた。

そして今日、彼はまた病院に運ばれてきた。ただし今までと違って、今回は特に外傷が見当たらない状態で。

では、彼は一体どんな理由で運ばれて来たのかというと…

「はあ、まさか腐っていたなんて…不幸だ」

今回の入院の原因は、何と食中毒であった。

今朝口にした食材の一部の賞味期限が、とうに切れていたのだ。

今朝は朝寝坊で遅刻寸前であり、冷蔵庫から適当に引っ張り出した食料を胃に放り込んだ。

その中に例の腐った食料が含まれていたが、この時は賞味期限を確認する余裕など無かった。

無情にもその食料は、上条の胃袋にダイレクトに送られる事となる。

玄関を飛び出す直前になって身体に異変が起き、尋常ではない苦痛に自ら199番、そのまま病院へ。

幸い症状は深刻なものではなく、投薬と点滴を受けつつ一日安静にすれば明日には退院できるらしい。

そして、4人部屋が全て満室だったため、個室に入室することになったのだ。

「はぁ、ヒマだ…」

時刻はまだ午前11時を回ったところ。

静かな病院で、する事も無く一日中一人で過ごすのは、入院に慣れた上条といえど苦痛であった。

「ヒマ潰しに誰かにメールでも送るかな。」

そう思い立った上条は携帯を取り出し、メールを打ち始める。

「えーと『…食中毒で入院しちゃってます、ヒマなのでお見舞いに来てくれると上条さんは嬉しいです』っと、こんもんでいいかな」

本文欄に捻りの無い文章を打ち込み、送信まで一歩手前まで操作する上条。

しかし、自分が無意識にある行動を取っている事にふと気付き、手を止めた。

「あれ？何でいつの間に俺、あいつに送ろうとしてるんだ？」

送信アドレス欄に、クラスの男友達らを押しのけて、御坂美琴のアドレスを入力していたのだ。

自らの想定外の行動にやや戸惑いつつ、頭を掻きながら原因を考えるが、回答は出せなかった。

「上条く〜ん、検査の時間…って、病室は原則ケータイは禁止ですよ！」

「あ、いっけねそうだった、すみませ〜ん」

不意に入室してきた看護師に咎められ、上条は慌ててケータイの電源を切り、引き出しにしまう。

電源を切る時、不意にあるボタンを押していたことに上条は気付いていなかった。

時同じ頃。常盤台中学校で授業を受ける一人の女子生徒のケータイに、一通のメールが届いていた。

## 第1話：とある入院患者（後書き）

初連載の第一話、いかがだったでしょうか。  
感想等頂ければ幸いです。

ちなみに筆者が前に入院した病院は病室でのケータイ使用OKでした。

第2話：とある見舞い人（前書き）

12 / 16（木）文章若干改正

## 第2話：とある見舞い人

ケータイをしまってから数時間経ち、時刻は午後4時を回る頃。

待合室から拝借してきた週刊誌も読み切ってしまい、上条は本格的にヒマを持て余していた。

ドアの外からは、医療機器の無機質な機械音と看護師のややテンポの速い足音が定期的に聞こえてくるのみ。

窓から差し込んでくる夕日が部屋の白壁を山吹に染め、悲壮感をより一層増幅させる。

しかし、その静寂は突如現れた一人の来訪者によって打ち消されることとなった。

「よっ、お見舞いに来てやったわよ」

「み、御坂!？」

ドアを開けて軽快に入室して来たのは、御坂美琴であった。

「どっしてここに…」

驚きを隠せず、目を丸くする上条。

数時間前のメールの事などすっかり忘れていた上条にとって、御坂の登場は予期せぬ出来事であった。

「あんたボケてるの！？来てくれってメール送って来たのはあんたの方じゃないの！あのあと全然返信も来ないし！」

そう言われて上条は、テレビ台の引き出しからケータイを取り出し、電源を入れてメールを確認する。

破棄したつもりだったメールを実はしっかり送信していた事によりやく気付く事となった。

同時に、御坂から何通かメールが送られてきていた事にも気付く。

返信が来ない事への怒りが前面に出された殺意バリバリのメールの数々に、上条は軽く冷や汗をかく…

とりあえず、ケータイの電源を切らざるを得なかった経緯を謝りながら御坂に説明した。

ベッドの横の椅子に腰かけ、腕を組み、横目で睨みながら、御坂は「仕方ないわね…」と一応は気を治めた様子。

態度は高圧的ながらも今回は仕方ないで済ませてくれたのは、衰弱した上条への御坂なりの配慮であり、優しさといったところだろうか。

そして、御坂が来てから空気が一変したことに、上条は軽く苦笑いを浮かべていた。

先ほどの通夜のような空気は勿論御免だが、ここまで騒々しいのモ  
いかなものか…

とんでもないヤツを呼んじまったかな、と心の中で呟きつつ、軽く  
ため息をつく。

しかし、何だかんだ言いながらも今日の御坂はメール一つで自分の  
ために駆けつけてくれたのだ。

プライドが高い上、自分に対してはいつも怒ってばかりに思えるあ  
の御坂がだ。

そんなギャップが可愛く思えると同時にややおかしくもあり、笑い  
が込み上げてくる。

「あんだ、なにニヤニヤしてんのよ？」

「いやあ、まさかお前がメール一つで駆けつけてくれるとは思えな  
かったからさ」

「っ…／／／！ケンカ売ってんの…！」

「って、なんでそうなるんだよ！てか、こんなところで電撃出すなあ  
！」

上条は特にふざけたつもりなど無かったが、御坂はからかわれたと  
認識してしまっていた。

「あ、あんたが下らないからかい入れるから…！」

「からかってなんかねえって！お前が来てくれたのは本気で嬉しいんだよ」

今度は真っ直ぐにこちらの目を見ながらそんなセリフを口にする。しかもマジ顔で。

「…べ、別に、今日はたまたまヒマだったから来ただけで…」

「いや、今日の上条さんは心も体もボロボロで、朝からずっと寂しかったんですよ。どんな理由であれ、来てくれてホント嬉しい。ありがとうな、美坂！」

再び緩んだ表情に戻しながらも、相変わらず恥ずかしいセリフを連発する上条。

そんな天然の猛攻に御坂耐えられるはずもなく、赤面しつつ目を逸らす。

（なんでコイツ、平然とこんなこつ恥ずかしい事が言えるのよ…！）

上条からすれば、正直な気持ちを素直に言葉にただけであつたが。

「おい、御坂？」

（お、落ち着け私、何か話題を逸らすのよ！）

御坂は混乱する脳を必死に回転させ、この場を乗り切る話題を絞ります。

「とところでア、アンタ、なんでも食中毒なんかになっちゃったわわけ？」

相当にテンパリながらも、何とか話題を逸らした。

「ああ、今朝かくかくしかじか……」

「あはは、ホント不幸っていうかマヌケよね」

「笑いごとじゃねえよ、ほんとに苦しかったんだからな」

「あんた、あのちびっこシスターと住んでるんだっけ？あの子が食べてたらもつと大変だったじゃない。これからは気を付けなさいよね。そういえば、あの子は今どうしてるたの？」

「ああアイツはいま、なんとか教会つてとこに一時的に帰ってるんだ」

大食漢の居候がいなくなったことで食料の消費ペースが減り、最近食料が一部余り気味だった。

上条を病院送りにした今朝の食料もその一部であった。居候の不在が、今回の食中毒の遠因となっていたのだ。

ちなみに、インデックスの不在を知った瞬間、御坂の口端がやや上がった事には上条は気付かなかった。

その後も他愛もない会話を続ける二人。

別れの時が刻々と近いている事に、二人は気付かなかった

## 第2話：とある見舞い人（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

色々後付け設定してしまいましたがご勘弁を。

今まで作ってきた短編小説と比べて反響が大きく驚いています。  
お気に入り登録して下さったみなさんには本当に感謝です。  
完結まで見守って頂ければ幸いです。

## 第2・5話 とある後輩の災難（前書き）

番外編のようなもの。黒子の視点で、御坂の学校から病院までの行動を補完しました。ややフライング気味な内容も含まれちゃってます。

## 第2・5話 とある後輩の災難

《常盤台中学校寮内にて》

今日は待ちに待った、お姉さまとショッピングの日ですの！

黒子は、この日をどれだけ待ちわびていた事か！

徹夜で考えた『お姉様とのラブラブ デートプラン』で、今夜はお姉様と…グフフ…グフ…

麗しのお姉様と結ばれる日が、ついにやってきたのですわあっ！！

ああ、お姉様が帰って来られましたのっ！

まあまあ、そんなに息を切らされて！お姉様も、今日のショッピングを楽しみにされていたのですね！

黒子は、黒子は感g 「ごめん黒子、今日行けなくなった！」 すわ！

……へ？お、お姉様、いい今なんと…？

ご、御冗談をお姉さま…。い、いやあああああっ！！嘘だと…嘘だと言っして下さいましっ！！

あの後、お姉様は調理室へ向かわれましたの…

それにしても、直前になって取り下げられるなんて、あんまりすぎますの！

お姉様はわたくしの事を何だと思っていらっしゃいますのっ。

それに、なぜ調理室へなど向かわれたのでしょうか…あ、お姉様が戻って来られましたわ！

さっそく、わたくしとの予定を突然取り下げられた理由、及び調理室に向かわれたの理由を教え…

って、またすぐどこかへ外出されてしまわれましたわっ！

怪しいにも程がありますの！こうしてはいられませんわ、後を付けていってやりますの！

お姉様、そんなに早足で一体どこへ向かわれていますの…あ、そちらの方向にあるのは確か病院でした筈。

病院…病院！？

病院と言えば、あの殿方が常日頃お世話になっている施設！お姉様、やはりあの殿方と！

い、いやいや落ち着け黒子！まだそうと決まっただけではありませんせんわ！

あの殿方が何らかの事件に巻き込まれた記録は、ここ最近は無かつ

た筈！今現在、入院しているとは考えられませんの！

きっとお姉様は、他の御友人のお見舞いに来ただけかもしれませんの、いや、そうに決まっていますわ！！

さきほどの調理室に向かわれていたのも、きっと御友人のお見舞いの品を調理されていたに違いありませんの！

ああ、そうこうしているうちにお姉様が病院の中へ！急いで追わねば！

ふう、やはり今回の件にはあの殿方は絡んでいらっしやらなかったようですわ。

なぜなら、お姉様が向かわれた先は内科の階！

そして、あの殿方がいつも入院されるのは外科の方！

今回の件は杞憂だったようですの。お姉さま、黒子は信じておりましたわ！

わたくしの予定を取り下げられたのは残念でしたが、御友人の方のお見舞いなら仕方ありません、黒子も引き下がるとしますわ。

さて、わたくしはこれで寮に戻：

おや？お姉様が病室のドアの前で立ち止っておられますわ。

という事は、あちらの病室がお姉様の御友人のお部屋なのでしょうか…

！？

おおお姉様？、なぜ…なぜ顔を赤らめていらつしやいますの！？

再び嫌な予感が！まさか類人猿なのか！？類人猿の部屋なのかああっ！！？

ひよひよひよ表札に書かれているなな名前は…！！

か・み・じょ…

やはりかど畜生がああああああああ！！

なななんで今回に限って内科に…！！というかあの類人猿、何回入院すれば気が済むんですの！！

ああっ！お姉様が…お姉さまが扉を開けて類人猿の待つ禁断のエリアにっ！！

お姉様、黒子が…黒子がいま助けに行きますわっ！！

おのれ類人猿う！わたくしとお姉様の仲を引き裂こうとした罪、命で償わせてやりますのおお！！

し、しかし…万が一良い雰囲気になってもなっていて、そんな状況に突入でもしたら、黒子は超絶空気の読めない子に！

そんな事をしてしまえば、お姉様にも嫌われる事間違いないですわ…！ししかし入らなければお姉さまが類人猿に！

く、黒子は…黒子はどうすれば…！こうなったらせめて、聴き耳たてて会話だけでもお！

『別に今日はたまたまヒマだったから来ただけで…』

お、姉様…ヒマだったって何ですの！わたくしとの約束を約束を破っておいてヒドすぎますのおおおお！しかも何照れてらっしゃいますのっ！

『どんな理由であれ来てくれてホント嬉しい！』

さわやかにお姉様ををたぶらかすな猿人類いいいい！！

あぁっ、部屋の中が静まり返ってしてしまいましたの！

こ、この空気はマズ過ぎますの…！ふふふ二人は密室の中であんな事やこんなことを…！！

イヤアアアおやめになっってお姉さま~~~~~！！！！！！

「なあ、さっきから外から変な音が聞こえないか？床になにかを打ち付けているような…」

「そう？気のせいじゃないの？」

「あれ、もう聞こえてこない（やっぱ気のせいだったのか？）」

---

直後、頭部から流血し意識を失った少女が外科に運ばれてきた。

## 第2・5話 とある後輩の災難（後書き）

THE説明口調、黒子。

黒子の言葉遣いの再現に苦労しました…

### 第3話：とある見舞い品（前書き）

第2話の続きです。今回、今までで一番文章に自信が無いです…変なところがあればご指摘願います。

### 第3話：とある見舞い品

「ところで御坂、門限は大丈夫なのか？」

御坂の一言で御坂は、外は日が沈みかなり暗くなっていることに気付く。

「あれ、もうこんな時間か。それじゃそろそろ帰るわね。そうそう、アンタに持ってきた物があるのよ」

そう言っただけで御坂はカバンから小奇麗に装飾された袋を取り出し、上條に手渡す。

「ん？何だこれ。開けるぞ」

中身は、手作りのクッキーであつた。

「マジかよ…」と、驚きを隠せない上條。

「アンタ、前に入院した時に、手作りがどうのって言ってたでしょ。わざわざ作ってきてやったんだから有り難く思いなさいよ。ま、あんたが望む『不器用なりに必死に作ったボロボロクッキー』じゃないけどね」

照れ隠しか、自慢げに経緯を話す御坂。豪語するだけあって、クッキーは整った形をしていた。

しかし、上條はそこではなく、まずメールを送ってからの短時間で御坂がわざわざこれを作ってきてくれたこと、そして上條自身です

ら忘れていた何気ないセリフを御坂がかなり具体的に覚えていたことの方に驚いていた。普段の上條であれば、この事を無神経にからかって御坂を怒らせる（照れさせる）のがお決まりであったが、今日は違った。

「おお、上條さんは今日は昼飯も食べてなくて、腹ペコで死にそうだったんですよ！といわけで早速いただきまーす！」

「ちょ、ちょっと、今食べて大丈夫なの！？まだ完全には治ってないでしょ？」

御坂は明日食べてもらうつもりだったが、空腹に飢えていた上條は構わず口に放り込む。

「ああ大丈夫だよこのくらい。んゝ、んまい！」

(…！)

御坂の鼓動が高鳴った。

今朝は上條からのメールを確認した後、授業に身が入らなくなった。学校から寮までの道のりは自然と早足になった。寮に着き、気がつけば調理室で作業していた。なんでアイツなんかのために…そう思いながらも、体は自然と動いていた。そんな経緯で作ったクッキーを、目の前の男は美味しそうにほおぶってくれている。そして、それを見て嬉しいと感じている自分がいる。

(わたし、どうしちゃったんだろ…)

自身の一連の行動と現在の自身の感情が整理出来なかった。

最初の1枚を食べ終えた上條は、2枚、3枚と続けざまに口に放り込み、10枚前後をあつという間に平らげてしまう。

「ふう、食べた食べた。御坂、ほんとおいしかったぜ！ありがとうな！」

「!？」

本日2回目の笑顔のありがとが、混乱する御坂に更に追い討ちをかけた。

「そ、そんじゃ門限に遅れるとマズイからわたし帰るね！それじゃ！」

ついに耐えられなくなった御坂は、逃げ出すように病室を出て行ってしまった。

「え？お、おい御坂…！行っちゃった…」

あつという間に出て行かれ、呆気に取られている。

しかし、さっきまでの出来事を思い返し、徐々に口元がにやけてくる。

「女の子にお見舞いに来てもらえた挙句、クッキーまで貰えるなんて、上条さんにしては最高に幸運な出来事なんじゃないですか！？朝は大変だったけど、トータルで見ればいい一日だった、うんうん

！  
」

食中毒にかかったにも関わらず、不思議と今日は幸せな一日だった  
と思えた。

「明日には退院だけど、学校も休みたいしあと一日退院が延びて欲  
しい…な～んてな」

そんな冗談を言う余裕すらあった。

直後…上條は再び激しい腹痛に襲われた。

まだ本調子ではなかった胃を急に働かせたのが原因であった。

結局退院は延び、翌日も学校を休む事ができた上条だが、幸運だと思わなかった。

### 第3話：とある見舞い品（後書き）

今時手作りクッキーで赤面はねーだろ、と自分自信に突っ込みつつ書き続けました。20年前の少女マンガのようなセンスでゴメンなさい。

一応補足させて頂くと、上条が再度腹を壊したのは腹が治っていないのに無理やり食べてしまったからであり、クッキーが腐ってたとか毒が盛られていたからではありませんのであしからず。

この連載は今回であらかた終了、あとちょっとあとがきや美琴のその後みたいなもの書いて完結させます。最後までお付き合い頂ければ幸いです。

### 第3・5話 とある怪我人（前書き）

黒子ファンの方々、お許しください！

### 第3・5話 とある怪我人

「ただいま」

「お帰りなさいまし、お姉様。今日は一体、こんな時間までどこへ行つてらしたんですの？」

「ちょ、ちよつとね…つて、アンタ何で頭に包帯巻いてるのよ」

「ちよつと転んだだけですの。…それよりお姉様…例の殿方のご体調はいかがでしたの？」

「！！な、なんでそれを…！」

「わたくしとの予定を取り下げてまでお見舞いに行かれるなんて、お熱いですこと」

「そそそんなじゃない！前の借りを返しに行つただけよ！」

「黒子は今日を…今日のお姉さまとのショッピングの予定を待ち侘びていましたというのに…それを…キイイイイあの類人猿がああ！」

「わかつたわかつた悪かつたわよ！！2日後の休日是一日中付き合つてあげるから落ち着きついてよ！」

「本当ですよ！？今度こそは本当ですわね！？ああつ、大好きですわお姉様〜！」

「うわっ、分かったから抱きつくな〜！」

「騒がしいぞお前たち!!」

「ぐへあっ!!」

黒子、ドアに挟まれ3日入院

### 第3・5話 とある怪我人（後書き）

初連載作品、まさかの5話で完結！水増しを抜かすと実質3話ほっち！自分にはまだ長編は書けそうにありません。しかし短いながらも小説執筆は未経験自分がここまで書き上げる事ができたのは、今まで読んでくれた方々のおかげです、本当にありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3829/>

---

とある病院の診療記録

2011年4月12日01時14分発行